

川口千里

「演奏を聴くだけで川口千里だと分かるドラマーになりたい」



世界中から熱い注目を浴びるドラマー、川口千里さんにインタビュー。彼女のドラムとの出会いや演奏活動に対する想い、また、11月から12月にかけて千葉で開催する「川口千里ドラムクリニック」「川口千里リーダーライブ with エリック・ミヤシロ クリスマススペシャル」への意気込みを伺いました。

——川口さんがドラムを始めたきっかけは何ですか？

5歳の頃、機械の分解を趣味にしている父が特売品の電子ドラムを衝動買いし、一度分解して興味がなくなっただけで「これで遊べ」とおもちゃ代わりに与えられました。当時「ドラムマニア」という音楽に合わせてドラムを叩くTVゲームがあり、電子ドラムに接続してゲーム感覚で演奏を楽しんでいましたね。そうやってドラムにハマり、地元の四日市でドラム教室へ通うようになったんです。

——ドラムのどんなところに魅力を感じましたか？

ギターなど他の楽器だと、演奏するために一定の技術が必要ですよね。その点、ドラムはスティックを振り回して叩けば、見よう見まねでもそれっぽい音が鳴るというシンプルさが面白くてハマりました。また、両親が持ち上げ上手で、私の演奏を「すごいぞ」とほめてくれたのでますます熱中しました。

——「こんなドラマーになりたい」という目標はありましたか？

8歳の時にプロドラマーの菅沼孝三先生が開いているドラム教室を紹介され、「プロの演奏ってどんな感じなんだろう」と気になり、まず先生が出演するライブを見に行きました。すると、「バックギンなんてやらないぞ」とばかりの勢いでギターやベースを食う迫力の演奏をされて、「ドラムは縁の下で力持ち」という私のイメージが大きく覆されました。ぜひこの人に習いたい！と思うと同時に、先生のように他の楽器と渡り合えるソリストとしてのドラマーを志すようになりました。

——菅沼さんからどんな指導を受けたのですか？

先生は基礎から細かく教えるタイプではなく、次々と課題を与えてテクニックを覚えさせるという、スピード感のあるレッスンでした。まだ楽譜が読めない状態で参加したグループレッソンの初日に、いきなりトリッキーな変拍子の楽譜を渡され、一度お手本を示してから「はい、叩いて」と言われた衝撃は忘れられません。私も負けず嫌いな性格なので、できないことがあると悔しくてたくさん練習を積みました。

——菅沼さんの元で学んだ中で、今も糧になっていることはありますか？

小学生の頃、先生のライブを見に行き、開演前に挨拶したら「おう、よく来たな。じゃあ、この間レッスンで習った曲を2部の頭で演奏するから、代わりに叩いてくれ」と突然言われ、普通に先生のライブを見に来たお客さんの前で演奏することになったんです。こんな方法で現場に飛び込ませて経験を積ませるなんて、先生でなければさせないでしょうね。こうした無茶ぶりのおかげで度胸がつき、その後はどんな現場でも「あの時の緊張に比べれば全然平気」と思えるようになりました。

——幼い頃から大人のミュージシャンと一緒に演奏することに戸惑ったり緊張したりしませんでしたか？

同級生とは音楽の趣味の話が合わなかったもので、大人の皆さんと音楽について話したり一緒に演奏することは、むしろ当たり前のことでした。ドラマーとして活動を始めた当初はひたすら自分の演奏を楽しんでいて、今思い返すと自分本位な演奏だったようにも思えますが、今ではミュージシャンとお互いに尊敬し合いながら演奏し、来てくれるお客さんに音楽を届ける大事さを噛みしめています。



——いつ頃からそうした心境の変化が生まれたのですか？

ファーストアルバムを発表した2013年ごろです。私のアルバムを楽しみにしてくれていた方たちから「大好きな作品になりました」などいろんな声が届き、リリース記念ライブにもたくさんの方に来ていただきました。そこで初めて、私の活動は演奏を聴いてくれる人ありきだということに気づくことができたんです。

——川口さんにとってファーストアルバムはいろんな意味でターニングポイントになったんですね。

そうですね。それ以降も私にとってアルバム収録は新しい世界を知る機会になっていて、1枚1枚が私にとってのターニングポイントになっています。2016年にメジャーデビューアルバムをロサンゼルスで収録することになった時も、最初は「どこで収録しても同じでしょ」と思っていたのですが、ドラムを叩いた時の音の違いにビックリしたことがあります。日本とは空気が違うからでしょうね。そのおかげで、「今一番良いと感じている音が実は一番ではない可能性もあるから、どんどんチャレンジしていこう」と思えるようになりました。

——川口さんが普段の演奏で大切にしていることはありますか？

どんな現場で誰と共演しても、常に「自分が一番良いと思える演奏をすべき」と肝に銘じ、物おじせずに挑んでいます。そして、皆さんが気持ちよく聴けるグルーヴ感を大事にしつつ、私の名前とドラミングをひも付けて活動していくことが理想です。誰のアルバムに参加していても演奏を聴くだけで「このドラムは川口千里だ」と分かり、「このドラミングが好きだ」と思っていたら嬉しいですね。



——今までで一番印象に残っている演奏はありますか？

1つに絞るのは難しいですが、一番緊張したという意味で印象に残っているのが、2017年のヤマハドラムス50周年記念コンサートです。若手枠で呼ばれたのですが、同じステージに立って共演したのが、日本のドラムレジェンドである神保彰さん、フュージョン界の世界的レジェンドであるデイヴ・ウェックルさん、そして“ジャズ界の生きる伝説”スティーヴ・ガッドさん。ドラマーなら誰もが悲鳴を上げるようなメンツです。しかもドラムソロの順番が、最初に私が温め役として演奏し、神保さん、ウェックルさんと続き、最後にガッドさんから再び私に回ってくるんですよ。レジェンドの素晴らしい演奏を受け取るという信じられない経験をいただき、「心臓が口から出るってこういうことなんだ」と思うほど緊張しましたね。

——主にソロとして活動する川口さんにとって、同世代の女性ミュージシャンと結成した「THE JAZZ AVENGERS」はどんな位置づけですか？

結成当初は「女子同士だと絶対もめるぞ」と心配していましたが、メンバーとは友達のように仲良くなり、今ではお互いに音楽の悩みや演奏のアプローチを気楽に相談し合っています。普段は目上の人と一緒に仕事することが多いので、そうした外に向けて挑戦する態勢を整える貴重な場にもなっていて、いわばホームのようなバンドと言えますね。

——今年の11月から12月にかけて千葉で開催する「川口千里ドラムクリニック」「川口千里リーダーライブwithエリック・ミヤシロ クリスマススペシャル」への意気込みをお聞かせください。

実はこれまで千葉で演奏する機会がなかなかなくて、メンバーのWaKaNaが富津市出身で観光大使を務めている縁から、昨年の南房総ジャズフェスティバルに出演させていただいたくらいでしょうか。今回、初めて会える方や、初めて私のサウンドを聴いてくれる方がたくさんいると思うので、素敵な公演になるよう楽しみにしています。また、エリック・ミヤシロさんをはじめ超一流のミュージシャンが多く参加するので、最先端のサウンドを楽しんでいただきたいと思います。



——ご自身の演奏でお客さんに楽しんでほしいポイントがありますか？

私のドラムは手数が多いパワフルな演奏が特長で、ありがたいことに皆さんから「聴いたらスッキリした」といった感想を多くいただいています。何か悩み事がありましたらぜひお気軽にお越しください。川口千里バンドの音圧を浴びれば、スッキリした気分でお帰りいただけると思います。

——演奏する機会があまりなかったと伺いましたが、千葉に対するイメージや思い出があればお聞かせください。

以前、兄と義理の姉と一緒に千葉へドライブに行き、木更津の江川海岸で海に電柱が浮かんでいる光景を見たことがあります。その光景がずっと印象に残っていて、今も千葉は心が落ち着く場所と感じています。あと、友達と一緒に行った東京ドイツ村が、いろいろツッコミどころ満載で楽しかった！「THE JAZZ AVENGERS」のメンバーが東京ドイツ村のステージで演奏したことがあるそうなので、私もいつか出演したいですね。

——最後に、今後の目標がありましたらお聞かせください。

全世界・全ジャンルの超一流ミュージシャンと一緒に演奏できる機会をどんどん作り、いろんなジャンルに挑戦していくことでそれぞれの美味しいところ取りをしていきたいと思っています。そして、いろんな素晴らしいミュージシャンや演奏を見に来てくれる皆さんと出会えるように、国境を超えて活動を広げていきたいなど常々思っています。

聞き手：古谷円佳（公益財団法人千葉県文化振興財団）
写 真：上平庸文

●プロフィール

川口 千里（かわぐち せんり）

5歳でドラムを始め、8歳からプロドラマーの菅沼孝三氏に師事。国内外の一流アーティストと共演を重ね、2013年、弱冠16歳で待望のファーストアルバム『A LA MODE』を発表。2016年にはキングレコードからメジャーデビューを果たし、2017年に『東京JAZZ』に出演してさらに注目を集める。2021年には女性8人組のオールスター・バンド『THE JAZZ AVENGERS』を結成し、ブルーノートで初のリーダー公演も開催。